

## 第八師団歩兵第五連隊の雪中行軍の医学的考察

—新発見の史料による山口少佐の死因の再検討—

松 木 明 知

### 一、はじめに

明治三十五年（一九〇二）一月末日に発生した第八師団歩兵第五連隊の八甲田雪中遭難事件は、明治政府、就中帝国陸軍を震撼させた大事件であった。

この事件を題材に新田次郎<sup>(一)</sup>は小説『八甲田山死の彷徨』を執筆したが、最近弘前大学のウェスターホーベン<sup>(二)</sup>は英語に翻訳して米国から出版した。

山口少佐以下二百十名の行軍参加者中、凍死した者は一九三名（九二％）を数え、生存して救助されたものわずか十七名（八％）のみで、しかも一七名の中、入院中死亡した者六名という悲惨な事故であった。

この事件の医学的側面について、筆者は救助され治療を受けた患者の「病床日記」（原病床日記）とする<sup>(三)</sup>の抄出写本<sup>(四)</sup>に加えて、それまで全く言及されることがなかった『陸軍軍医学会雑誌』<sup>(五)</sup>に発表された青森衛戍病院の論文を検討し、巷間非常に問題となっている山口少佐の死因についても言及した。

右に述べた病床日記の抄出写本は、後に関東軍軍医部長となった出井淳三が、昭和の初期に青森衛戍病院に保存され

ていた病床日記（現在散佚して行方不明）から、生存して救助された十七名の兵士の中九名のみについて抄出したもので、出井自筆の写本は陸上自衛隊衛生学校に保存されている。本史料は活字化されて青森市史に収載されている。<sup>(五)</sup>

一方筆者が発掘した史料は「明治三十五年凍傷患者治療景況」と題した論文で、「青森衛戍病院」の名前で、明治三十六年（一九〇三）五月発行の『陸軍軍医学会雑誌』百三十六号に発表されたものである。まず冒頭に「凍傷患者一覧表」を示して、十七名の収容月日、手術月日、手術部位、転帰、官等、氏名を記述し、次いで一般病歴経過（一般、局所）療法（一般ノモノ、局所ノモノ）、転帰に分けて述べている。

筆者は右の二つの信拠すべき史料を検討し、山口少佐の両手の凍傷の程度から推察して、山口少佐は新田の小説にも記述されているように自らピストル自殺が出来る状態にはなかつた筈であると結論した。なお雪中行軍一般に関しては歩兵五連隊が編纂した『遭難始末』<sup>(七)</sup>やその他の史料<sup>(八)(九)</sup>などがある。

## 二、新史料「明治三十五年凍傷患者治療報告」の発見

平成四年<sup>(一〇)</sup>（一九九二）一月、青森市で開業している村上正一医師宅の土蔵から「明治三十五年凍傷患者治療報告」と題する史料が発見された。版心に「青森衛戍病院」と刻されている一枚二十二行の縦野紙六十六枚に書かれたものである。題名の次行に「青森衛戍病院」とあるから「青森衛戍病院」の軍医による報告書であることが判る。

村上正一博士の話によれば、氏の伯父村上其一が当時軍医として青森衛戍病院に勤務しており、その関係で本史料が村上正一博士の宅に保存されたのであろうという。また村上博士によれば本史料の筆跡は村上其一のものであるという。村上其一は、本来であれば雪中行軍に参加する予定であったが、旭川で雪中行軍の経験のある若い軍医が行軍を志願したため、自分は辞退した旨、生前に村上正一博士に語ったことがあるという。後述するように本史料の内容を詳細に検討してみると、記述は正確であり、その出所などを併せ考えても十分信拠すべきものであると考えられる。なお本史料

は陸上自衛隊第九師団（青森）の防衛館に寄贈された。

村上正一博士の記憶と弘前衛戍病院長前川軍医の話<sup>(一)</sup>を総合すると、村上其一の部下の軍医とは永井源吾三等軍医に間違いない。というのは、雪中行軍に参加した軍医は永井軍医唯一人だけであったからである。

「永井三等軍医の遭難」<sup>(二)</sup>や『陸軍軍医学会雑誌』<sup>(三)</sup>一二七号の永井軍医の逝去を報ずる記事とを総合すると、永井軍医は金沢市の出身で明治三十年十一月苦学の末旧第四高等学校医学部医学科を卒業して医師となり、志願して三十一年（一八九八）十二月に金沢の第七連隊に入隊し、明治三十三年（一九〇〇）青森第五連隊に赴任して三等軍医になった。生前北海道の軍隊にもいて雪中行軍の経験もあるという。年二十九歳。（但し「永井三等軍医の遭難」には二十七歳とある）明治三十五年二月八日発行の『東京医事新誌』<sup>(四)</sup>一二四二号の「青森歩兵五連隊の遭難」関係の記事中弘前衛戍病院長前川軍医正の談話として、「――前略――永井三等軍医は最後迄元気が非常でありし由尚此永井軍医は昨年も行軍に従へる事あり今度も是非同行して雪中患者の治療法運搬法等を研究せんとの希望を以て従行せしなり」とある。

永井軍医の雪中行軍の経験について村上正一博士は村上其一の生前の談話として「旭川」をあげ、前川軍医正は場所を特定しておらず、武谷軍医正は「北海道」として一致していないが、永井は金沢の第七連隊から青森の第五連隊へ転勤になったもので、その間北海道の連隊に勤務したとは思われない。この問題については後日を期したい。

### 三、新発見の「明治三十五年凍傷患者治療報告」と

#### 「明治三十五年凍傷患者治療景況」の比較

今回新たに発見された「明治三十五年凍傷患者治療報告」（以下単に「治療報告」と略す）と『陸軍軍医学会雑誌』<sup>(一六)</sup>に発表された「明治三十五年凍傷患者治療景況」（以下単に「治療景況」と略す）を比較検討してみる。

まず「治療景況」の冒頭の部を左に抄出する。

明治三十五年一月二十七日歩兵第五連隊雪中行軍遭難ノ報アリ次テ生存者救援隊派出ノ挙アリ続々生存者ヲ発見スルニ当リ衛生部員ノ不足ヲ告ク全月三十一日第八師団長ヨリ急行青森ニ出張スヘキ旨ヲ在山形衛戍病院陸軍一等軍医中原貞衛ニ命ス 軍医ハ翌二月一日山形ヲ発シ全二日午前九時当院ニ到着シテ凍傷患者ノ治療ニ従事ス当時既二三回患者ヲ收容セリ爾後又收容スル事二回前後合シテ患者総員一七名内死亡六名治癒退院三名兵役免除八名アリ其概要左表ノ如シ

次に「治療報告」の冒頭の部分を記す。

明治三十五年一月二十七日歩兵第五連隊雪中行軍遭難ノ報アリ次テ生存者救援隊派出ノ挙アリ続々生存者ヲ発見スルニ当リ衛生部員ノ不足ヲ告ク同月三十一日第八師団長ヨリ急行青森ニ出張スヘキ旨ヲ在山形衛戍病院陸軍一等軍医中原貞衛ニ命ス 軍医ハ翌二月一日山形ヲ発シ同二日午前九時当院ニ到着シテ凍傷患者ノ治療ニ従事ス当時既二三回患者ヲ收容セリ爾後又收容スルコト二回前後合シテ患者総員十七名内死亡六名治癒退院三名兵役免除八名アリ其概要左表ノ如シ

両者を比較して見ると「同」と「全」の違いはあるものの全く同一であることが分かる。

次に両史料に「表」が掲げられているがこれも全く同一である。その次には、「治療景況」では「以下先ツ 一般病歴ヲ序シ次ニ 各人ノ病歴ヲ述ベン」とあるが、「治療報告」では「以下先ツ 各人ノ病歴ヲ序シ次ニ 一般病歴ヲ述ヘン」となつて順序が逆になっている。

しかし「治療景況」においては「各人ノ病歴」は省略されて記述されていない。

一方「治療報告」においては、「各人ノ病歴」は詳細に記述され、第二枚目から第五十一枚目まで五十枚にわたって詳しく述べている。

そして第五十二枚から第六十六枚目までが「一般病歴」である。「治療景況」には各人の病歴を欠くので「一般病歴」について「治療景況」と「治療報告」を比較すると、既往症、現症、経過(第一、一般ノモノ、第二、局所ノモノ)、療法(其二、一般ニ関スルモノ、其二、局所ノモノ)、転帰に至るまで、両者の文章は全く同一である。但し「治療報告」では右の「既往症」など見出しの項はカッコが付されているが、「治療景況」ではこれが省略されているのみである。両者の同一性を例示すると「転帰」の項で、大変重要である山口少佐の死亡時の状況を「治療景況」では「山口少佐ハ三分前ニ看護者カ水ヲ給セン乎ト問ヒタルトキ明ニ要セスト答ヘ顔貌モ呼吸モ異常ナカリシモノ卒然貧血「チアノーゼ」を呈シ眼球上竄(一般瀕死ニ見ル所ニシテ呼吸衝突状トナ

第一表 凍傷患者一覽表

(順序はそのまま氏名のみ記す。○印は手術を受けたもの)

治療報告	治療景況	病床日記抄
<ul style="list-style-type: none"> <li>○後藤 房之助</li> <li>○三浦 武雄</li> <li>○阿部 卯吉</li> <li>山口 銀</li> <li>倉石 一</li> <li>伊藤 格明</li> <li>○小原 忠三郎</li> <li>高橋 房治</li> <li>○山本 徳次郎</li> <li>○及川 平助</li> <li>○後藤 惣助</li> <li>紺野 市次郎</li> <li>長谷川 貞三</li> <li>○阿部 寿松</li> <li>○佐々木 正教</li> <li>○小野寺 佐平</li> <li>○村松 文哉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○後藤 房之助</li> <li>○三浦 武雄</li> <li>○阿部 卯吉</li> <li>山口 銀</li> <li>倉石 一</li> <li>伊藤 格明</li> <li>○小原 忠三郎</li> <li>高橋 房治</li> <li>○山本 徳次郎</li> <li>○及川 平助</li> <li>○後藤 惣助</li> <li>紺野 市次郎</li> <li>長谷川 貞三</li> <li>○阿部 寿松</li> <li>○佐々木 正教</li> <li>○小野寺 佐平</li> <li>○村松 文哉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○後藤 房之助</li> <li>○三浦 武雄</li> <li>○阿部 卯吉</li> <li>○小野寺 佐平</li> <li>○佐々木 正教</li> <li>○阿部 寿松</li> <li>○村松 文哉</li> </ul>

リ口鼻ヲ開キ三十分間ニシテ逝ケリ」とあり、一方「治療報告」には「山口少佐ハ三分前ニ看護者カ水ヲ給セント乎ト間ヒタル時明ニ要セスト答ヘ顔貌モ呼吸モ異常ナカリシモノ卒然貧血「チアノーゼ」ヲ呈シ眼球上竄（一般瀕死ニ見ル所ニシテ呼吸衝突状トナリ口鼻ヲ開キ）三十分間ニシテ逝ケリ」とあつて、わずかに「治療景況」において、眼球上竄の説明文の下のカッコが付されていないだけで、文章は全く同一である。

以上のことから、「治療景況」と「治療報告」は同一人物つまり村上其一の手になったものであることは明白である。なお参考のため救助された患者名を第一表として示しておく。

#### 四、「治療報告」と出井の「病床日記」の比較

前述したように「病床日記」は出井軍医が原本とも言うべき「原病床日記」から自分で必要と思われる個所を抄出したものである。

村上其一もこの「原病床日記」を参考にして執筆したはずである。したがつて「治療報告」の患者一覧表中の患者の氏名と順序は「治療景況」のそれらと全く一致しているのも当然である。出井の「病床日記」は、氏名、入院番号、病名、調製医官、原籍、部隊号、官等級及氏名、職業、傷痍疾病等差、出生、勤仕年、発病、初診、入院、退院、転帰が各々記述され、次いで血族的関係、既往症、原因、経過、現症及治療に及び、最後に月日時刻と患者の容態の変化が日記的に「病床日記」として述べられ、その下には投薬や局所治療薬について記されている。

一例を示すと、第一番目の後藤房之助については、入院番号は「青森衛戍病院第十五号明治三十五年一月二十八日」病名は「凍傷」、調製医官は「青森衛戍病院附 陸軍一等軍医小出威夫」などとあり、この項の最後の転帰は「兵免」とある。

「血族的関係既往原因経過現症及治療」では「両親並ニ同胞五人患者ハ其ノ三子ニシテ他ハ皆健全家系遺伝病ノ徴ス

ベキモノナシ。」で始まり、次いで行軍の経過、後藤が救助されるに至るまでの状況に及んでおり、最後は「現症精神正確ナルモ談話ヲ永ク持続スル能ワズ、身心大二疲労ノ感アリ、顔貌紅ヲ潮シ口渴ヲ訴フ、両手足背面ニ大ハ鶏卵小ハ一錢銅貨大ノ水泡三、四箇発生シ、指趾ノ光暗紫色ヲ呈シ知覚鈍麻アリ且ツ疼痛ヲ訴フ」で終わっている。

次の毎日の容態について記した「病床日記」（これは史料全体としての出井の「病床日記」ではない）の項では上段には「一月二十八日 午後五時三〇分収容 入院当時患者ノ現症ハ、本誌記載ノ如ク体温 脈拍 異常ナク頻ニ口渴四肢疼痛ヲ訴フ、顔貌紅ヲ潮シ両眼軽度ノ結膜炎ヲ起ス。……」とあり、下段には「卵武蘭 一劑 塩里母二〇〇・〇 赤酒八〇・〇 右数回分服 一〇％イヒチオールワゼリン患部塗布 手浴足浴」とある。最後の病日は九月五日で「九月五日 四肢断端変常ヲ来サズ疼痛ヲ発セス、義肢装着シテ歩行スルコト他ノ凍傷患ニ比スレバ正確ナリ。体重四八、四五〇瓦 全身栄養佳良心肺異常ナシ 明治三十五年九月十日兵役免除 陸軍一等軍医村上其一」と記されている。

一方村上其一の「治療報告」においては、「凍傷患者一覽表」の次に「各人病歴」があり、病歴の中、発見されるまでの経過などは一般病歴において述べるので重複を避け省略するとしている。次いで氏名を記し次に、既往、入院時所見手術（執刀医氏名）とその後の経過に及んであり、いわゆる病床日記の形式は異なっており、それらを総括した文章形式となっている。

第一例の後藤房之助の場合を例にとると、「入院時所見」には「神識明晰ナレ共身神大二疲労シテ久シキ談話ニ堪エス顔面潮紅荐ニ渴ヲ訴ヒ」とあり、「病床日記」の記述に酷似する。

二月八日に行われた手術の条では、上肢の手術は中原一等軍医、下肢は小出一等軍医が行ったとあり、各々手術について詳しい記述が見られる。「病床日記」にも手術術式についての記載はあるが、術者の記述はない。創傷の治癒の状況が日を追って記されており、最後の退院近くの状況については、次のように述べられている。

二十三日(四月)松木注)青森県東津軽郡浅虫温泉場ニ転地スル事十六日ニシテ帰院ス全身栄養益佳良トナリ各創面全ク癒痕ヲ結シテ治癒シ爾来変常ナシ

治後ノ機能上甚タ可憐ナリ上肢ハ棍棒状ニシテ殆ント把握作用ヲナサス然レ共筆ヲ繙縛スル時ハ細字ヲ書シ自ラ家郷ニ文通ヲナス食匙ヲ縛スレハ自ラ食事ス下肢ハ義肢ヲ装ヒ歩行セシムルニ辛フシテ歩行スルヲ得タリ尚習熟セバ巧ナルニ至ラン

九月十日兵役免除セラレ同日退院特全身栄養佳良体重四九八五〇瓦肺活量三二〇〇cc

右の条を出井の「病床日記」の中に求めると次のようである。

四月二十四日

本日午前十時三十分病院出発、浦町停車場ヨリ汽車ニテ正午浅虫転地療養所ニ到着暫時休憩ノ後入浴セシメタリ、患者途中ハ勿論入浴後些ノ障碍ナク精神状快ナルノ如シ。

五月九日

本日浅虫転地療養所ヨリ帰院ス、栄養出発前ニ比スレバ大ニ佳良トナリ、左下肢ノ断端ノ潰瘍面全治スルニ至ル。

七月三十日

全身栄養佳良、体重四万九千八五〇瓦、肺活量三千二百、胸围二尺五寸五分、現今創面全ク治癒スト雖モ両下肢ハ下腿中央以下両上肢ハ五指ヲ亡スルニ由リ不堪兵役者ト診定ス

九月五日



四肢断端変常ヲ来サズ疼痛ヲ発セス、義肢装着シテ歩行スルコト他ノ凍傷患者ニ比スレバ正確ナリ。体重四八、四五〇瓦。全身栄養佳良心肺異常ナシ

村上は「治療報告」の中で浅虫に転地した月日を四月二十三日としているが、これは二十四日の誤りであり、また退院時の後藤房之助の状態は佳良で、体重を四九、八五〇瓦、肺活量を三二〇〇ccとしているが、出井の「病床日記」によつて、これは七月三十日のデータであり、村上はこれを退院時のデータとして記したものである。両者を比較すれば、村上其一が、「原病床日記」から必要事項を抄出し、「治療報告」を執筆したことが明らかであろう。

## 五、手術担当医と麻酔方法

村上の「治療報告」には「治療景況」や出井の「病床日記」には記述されていない術者名と麻酔方法が記述されているので一括して第二表に示しておく。

生存して救助された十七名の中、全く手術を受けず回復し退院したのは、倉石一大尉、伊藤格明中尉、長谷川特務曹長の三名だけで、山口銀少佐、高橋房治伍長、紺野市次郎二等卒は手術を受けることなく入院中死亡した。したがつて手術を受けたのは十一名である。第二表によつて分かるように全ての手術はクロロホルム、エーテルの等分混合液を用いた全身麻酔下に行われている。当時の陸軍の軍医たちは、主としてクロロホルム単独による麻酔を行っていたが、凍傷患者の一般状態が悪かつたため、安全性を考慮してエーテルを加えて、クロロホルム五〇%、エーテル五〇%の混合液を気化して吸入させたのである。

手術もすべて山形衛戍病院から応援にかけつけた中原貞衛一等軍医と青森衛戍病院の小出威夫一等軍医の二人が担当しており、村松文哉だけは、中原、小出に加えて村上其一が手術に参加している。

第二表 患者、麻酔方法と手術時間

氏名	部位	麻酔法・手術時間	術者
後藤 房之助	上肢 下肢	麻酔薬(クロロホルム・エーテル等分) 混合(左も同じ・松木 註)三五cc 一時間	中原 小出
三浦 武雄	上肢 下肢	麻酔薬四〇cc 四十五分	記載なし 中原 小出
阿部 卯吉	上肢 下肢	麻酔薬五五cc 一時間二分	小出 中原
小原 忠三郎	上肢 下肢(二回)	麻酔薬三五cc 三十五分 麻酔薬五〇cc 五十分	中原 中原 小出 中原 小出
山本 徳次郎	下肢(二回)	麻酔薬三五cc 三十五分 麻酔薬四〇cc 四十五分	中原 小出 小出
及川 平助	上肢 下肢	麻酔薬四〇cc 二十分	小出 中原
後藤 惣助	下肢(二回)	麻酔薬三〇cc 三十分 麻酔薬二三cc 二十九分	中原 小出 二回日記載なし
阿部 寿松	上肢 下肢	麻酔薬八三cc 一時間	中原 小出
佐々木 正教	上肢 下肢	麻酔薬四〇cc 四十六分	中原 小出
小野寺 佐平	上肢 下肢	麻酔薬八〇cc 一時間十五分	中原 小出
村松 文哉	上肢 下肢(二回)	麻酔薬五〇cc 一時間五分 麻酔薬三〇cc 二十八分	小出 村上 中原

いずれの患者も容態が悪かったので、可能な限り手術時間を短縮するため中原と小出の二人が同時に手術施行したのである。殆んどの手術は一時間以内で終了している。

## 六、山口少佐の症状

筆者は前稿において、山口少佐の症状について論じた。しかし少佐の症状については、これまでの史料「治療景況」、「病床日記」「遭難始末」<sup>(七)</sup>その他には殆んど記載がなかったが、「治療景況」の中で最も詳しく言及されており、「山口少佐ハ三分前ニ看護者カ水ヲ給セント乎ト間ヒタルトキ明ニ要セスト答ヘ顔貌モ異常ナカリシモノ卒然貧血(チアノーゼ)ヲ呈シ眼球上竄(一般瀕死ニ見ル所ニシテ呼吸衝突状トナリ口鼻ヲ開キ三十分間ニシテ逝ケリ。腐敗ハ未ダナラス熱モ亦此日初メテ僅ニ上リタルノミ精神ハ犯サレアラス敗血症トハ謂ヒ難シ想フニ興奮ノ処置ヲ以テ僅ニ保チタル心臓ノ遂ニ其ノ作業ニ堪ヘスシテ卒然麻痺セルモノニ由ラン」とあるによつて、山口少佐の死因を推察した。

さらに山口少佐がどの程度の凍傷を蒙つたかについては、歩兵五連隊の編による「遭難始末」<sup>(七)</sup>の記事「一月三十一日午後三時於大滝下流谷底発見四肢凍涸僅ニ人事ヲ弁ス」を参考に推察を加え、少なくとも山口少佐は、雪中行軍の研究(一五)者小笠原孤酒が主張し、それを根拠として新田次郎が小説の中で描写したようなピストルによる自決ではなかったと推察した。

山口少佐一行二百十名の兵士達が青森市郊外の田代に向かつて一泊の演習行軍のため、青森屯営を出発したのは明治三十五年(一九〇二)一月二十三日午前六時五十五分であった。出発時の天候は、気温零下摂氏六度で、風も強くなかつた。しかし午後になると風雪が甚しくなり、夕暮れと共に一行は進路を失い、午後八時十分に至つて鳴沢(地名)松木(注)の東南方の平沢で露營することを決意した。各自は雪壕を掘り、僅かばかりの焚火で暖をとつたが、気温は零下十二、三度に低下し、西からの風雪は益々強くなつた。

翌二十四日、風雪は弱まるどころか益々強くなり、気温も零下十二、三度に及んだが、山口少佐は、この二十三日の夜営によって、本来の田代一泊行軍の目的は達せられたものと考え、朝五時に青森に帰營することを決意し、その旨を部下に伝えた。

しかし不幸なことには風雪益々激しく、一行は方向感覚を失い進むべき道を誤ってしまったのである。予想以上の風雪と寒気、不十分な防寒具に加えて、食料は凍結して摂取することが出来ず、さらに睡魔に襲われた一行は、四肢の凍傷になるものが増加し、意識を失って倒れる者も続出した。この時すでに、山口少佐は凍傷に罹っていたと「遭難始末」は伝えている。

行軍三日目の二十五日になると、人員の三分の一は既に酷寒のため死亡し、三分の一は凍傷で運動の自由を失い、残りの三分の一のみが健全で歩行が漸く可能であった。

一行は青森を目指したが、寒気と丈余の積雪のため遅々として進まず、結果的には二十三日の夜営地からわずかに青森寄りの場所で夜営するのを止むなきに至った。この日の午前五時に山口少佐は人事不省となり、永井軍医が救護に努力した。意識不明の少佐に代わって指揮した倉石一大尉は山口少佐に大隊本部や家族への遺言を尋ねたが答えることはなかったという。しかしこの日の昼頃には山口少佐は、漸く意識を回復した。

凍傷、空腹、寒気に耐え兼ねて一行の中脱落するものがさらに続出し、行軍を続ける者はわずかに五、六十名を数えるのみであった。この日の午後十一時頃は山口少佐は再び昏倒したが、部下の懸命の手当によって再び蘇生した。しかしこの日の夜営地に至った時には、山口少佐は全く人事不省の状態であったという。

一月二十六日午前一時頃、脱落する者はさらに多くなり、一行はわずかに三十名を数えるに過ぎなかった。倉石大尉らは進路の決定に苦慮したが、村落のある田茂木野までは八キロ内の距離にあると判断し、風も弱まったので行軍を続

けることにした。この時山口少佐は昏倒したままであった。

山口少佐を連れ、倉石大尉の一行九人は、駒込川の溪谷に陥り、下流に向かって歩行したが、最終的には大滝下流付近で進退が極まったのである。

一月三十一日の午後四時頃、第八哨所の津川第五連隊長の許に、大滝下流付近に生存者がいるという報が入り、連隊長、武谷一等軍医などが急行した。しかし生存者は数十メートルの下の崖下にいるため、救助隊員は樹木に電線、ロープを結んで崖下に下りた。ここで山口少佐、倉石大尉、伊藤中尉、小原伍長、高橋伍長、及川一等卒、山本徳次郎一等卒、紺野市次郎二等卒、後藤惣助一等卒など九人が発見されたのである。

倉石、伊藤、及川は自力で崖の登攀が可能であったが、山口少佐などは、身体を毛布で包んで崖上に引き上げた。厳寒に加え、丈余の積雪のため、救助作業は難航し、全員を救助し、第八哨所に收容したのは、八時間後の午後一二時を過ぎていた。

山口少佐たちが発見された大滝下流から南方の第八哨所に收容され、さらに青森衛戍病院に入院するまでの約二十四時間の山口少佐の容態についてはこれまで知られていなかった。行軍出発から死亡まで、日を追って山口少佐の行動を第三表に示しておく。

### 第三表

二月	一日	夜	入院
二月	二日	午後八時	死亡
二十三	日		
二十四	日	午後	凍傷に罹る。
二十五	日	午前五時半	人事不省、質問に答えず。

午前十一時頃 意識を回復。

午後 三度昏倒し、蘇生す。

午後十一時 人事不省となる。

二十六日 午前一時 昏倒の状態

午前十一時 青光付近

三十一日 午後十二時 山口鋌、倉石一、伊藤格明、高橋房治、小原忠三郎、山本徳次郎、及川平助、後藤惣助、紺野

市次郎ら救助される。

「治療報告」の中で山口少佐に関する病歴は、第十四枚の後半から第十五枚目の前半に十八行にわたって記載されている。少し長くなるが左に引用する。なお原文に句読点はないが、読みやすくするため筆者が付けたことを御了承戴きたい。

#### (四) 陸軍歩兵少佐山口鋌

安政三年十二月生

(既往)一月二十四日ヨリ同二十七日、駒込川沿岸ニ落着スルニ至ル間、人事不省トナル事ニ回、身神非常ニ疲労シ、自ラ行動スル事能ハス。倉石大尉以下ノ必輔ニ頼リテ、生命を繋キ得タリ。沿岸ニ突出スル岩窟アリ。岩下自ラ風雪ヲ防クヘシ。同行ノ必輔者屢其岩窟内ニ入ラン事ヲ勧告ス。頑トシテ動カス。只死ノ晩(おそき)松木(注)ヲノミ恨メリ。故ニ風雪其威ヲ逞フシ、四肢ノ凍沍甚シ。雪上ニ坐シ、周囲ノ雪ヲ嚙ミ、起タスシテ溺尿ス。手ニハ毛絲ノ手套、足ニハ藁靴ヲ穿テリ。同三十一日、搜索隊ニ発見セラレ翌二月一日入院。

(入院時所見) 身神疲労シテ眠ヲ貪ル。然レ共、神識尚明瞭ニシテ、問ヘハ正シク答フ。上下肢甚シク、凍傷シ、指趾蒼白硬固、手足甚シク腫脹シ、延テ肘膝ニ及ヒ、躰温三十七度、脈九十四細弱。

(経過) 二月二日之ヲ診スルニ、下肢ハ両膝関節以下強ク腫脹シ、微ニ充血ヲ呈シ、両足関節部一般ニ冷却シテ暗紫赤色ヲナシ、足背動脈微ニ触ルルノミ。上肢ハ両腕関節ノ上方四仙米以下暗赤色ヲ呈シ、指ハ悉ク屈曲シテ、水泡多生ス。呼吸脈搏共不良ナラス。此日躰温三十九度、脈百八。午後八時卒然呼吸不利ヲ来シ脈不正トナリ、全八時三十分遂ニ死亡。

(二)(四) 筆者は前稿において、山口少佐の症状をこの救助患者の状態から推定し、次のように記した。

後に「凍傷の予防には四肢を動かすことが一番効果があつた」と伊藤中尉が述べているが、すでに行軍第二日目の一月二十四日から意識を喪失したりして、憔悴の極めて甚だしかつた山口少佐が、いかに部下が四肢を毛布で被つたとしても、重症な凍傷を蒙っていないはずはない。もちろん大滝下流にいた五日間全く火の気はなかつた。むしろ他の者よりひどい状態であつたことが容易に推察される。

前掲の「治療報告」中の山口少佐の四肢の凍傷に関する記載は筆者の推察を見事に裏付けていると言えよう。中でも注目すべきは、「故ニ風雪其威ヲ逞フシ、四肢ノ凍沍甚シ」の状態であり、そのため「上肢ハ両腕関節ノ上方四仙米以下暗赤色ヲ呈シ、指ハ悉ク屈曲シテ水泡多シ」という状態であり、このため放尿時にもズボンのボタンのかけはずしが不可能なため、座したまま「溺尿」したのである。

山口少佐と同所で発見され、意識が明瞭で自力で崖を登ることが出来た倉石大尉、伊藤中尉、及川一等卒は入院後の治療でも次に述べるように凍傷は軽度であつた。

倉石大尉は、手は軽度の腫脹のみ三日で旧に復し、右足先端は変色したが、潰瘍とならず、左足第一趾には潰瘍を作つたが二月十五日には全快している。

伊藤中尉の下肢末端は軽度の凍傷で腫脹し、潰瘍を形成したが、間もなく趾爪がはがれただけであつた。

辛うじて歩行が可能であつた及川一等卒は、右第二指、三指の末節を切断、右下肢第二趾末節を切断、両足のアキレス腱を裁断した。

自力歩行が可能な右の三人は、他の者に比較すれば凍傷は極めて軽微であつたといわなければならぬ。

山口少佐と同じ場所で救助された患者について入院時の上肢の症状を見ると、高橋房治は、二月一日午後三時半に入院したが、両手は重症な凍傷に罹っており、手術を待たず、同日午後八時三十分急死した。小原忠三郎は、両手は紫色で前腕三分の一以下著しく腫脹していた。翌日には、変色し水泡を多発し、二月九日に、両拇指を除き四指を切断した。

山本徳次郎は、両腕関節以下腫脹して暗赤色を呈していたが、翌日には右手の腫脹は幾分治まつた。指の背面に水泡を形成し、左手もほぼ同様であつた。両手の症状は軽微で手術をしなくても済んだ。

及川平助の両手は、悉く硬固で知覚は全くなかつた。翌二月二日には、両手指には水泡が多発した。とくに右手の症状は著しく、二月十一日に第三、四指の手術を行っている。

後藤惣助の手は、腫脹し拇指以外は、暗紫色を呈し、水泡や壊死の部が見られたものの、回復し手術を免れた。

紺野市次郎の両手は著しく腫脹し、右手二、三、四指、左手は二く五指が暗赤色を呈していた。二月三日には多数の水泡を発したものの、快方に向かつたが、七日午後一時四十五分死亡した。

山口少佐救助の現場に居合わせた武谷軍医<sup>(七)</sup>正は、小池医务局長へ書翰を送つたが、その中で山口少佐の四肢凍傷は重症であり、生命上の予後も疑しく四肢の機能上の予後については、「両手足を失うべし」と記している。倉石と伊藤につ



いては、凍傷は軽症で生命の予後は佳良、機能上も完全に復旧するであろうと記述している。これによって武谷の判断が正しかったことが分かるし、山口少佐の病状を正確に述べていると考えられ、「治療報告」の記述ともよく一致する。以上記したように山口少佐の入院前後の両手の凍傷所見や彼と同時に救助された部下たちの手の凍傷の程度を併せ考えると、とても山口少佐が自力でピストルの引金を引くことは不可能であったことは、容易に理解されるであろう。

## 七、根拠のない自殺説

山口少佐の自殺説は、だれがいつから唱えたのであろうか。新田次郎は『八甲田山死の彷徨』の中で、山口少佐が自決したとその二一〇頁から二二三頁にわたって次のように描写している。

自決したのは山口少佐であった。(二一〇頁)……中略

中から返事があったのと、奥の方で銃声が聞こえたのと同時であった。看護卒は急いで廊下を走って帰り、そのあと軍医が追った。

すべては終わっていた。山口少佐は心臓を見事に打ち抜いて倒れていた。(二二三頁)

山口少佐が凍傷で行軍の指揮の責任も果たさず、突然死亡したというだけでは、小説として読者に大した感動も与えないことになる。侍従式官を通じて明治天皇の御沙汰を拝して後に軍人らしく自決してこそ、人の心を打つものがある。そのように考えて新田はピストル自殺を考えたのであろうが、新田が死亡した現在詳細については知りようがないが、自殺説を暗示する特別の史料があったとは考えられない。

しかし前述したように、救助されるまでの山口少佐の状況と彼の凍傷の程度を考慮するならば、自殺の可能性は極め

て小さいと見なすのが当然である。気象庁に勤務した経験もある新田であり、気象に関しては詳しいが、「遭難始末」を熟読したものの、医学的知識には欠けるところがあつたと言わざるを得ない。

新田に自殺説を教示したのは、雪中行軍の研究者小笠原孤洒<sup>二五</sup>であろう。昭和五十二年（一九七七）十一月十一日の東奥日報によれば、小笠原は、昭和四十五年（一九七〇）東京都中野区で米田みねさんに会い、次のようなことを聞いたという。

一、山口少佐は死の行軍のあと一月三十一日に発見され二月一日青森衛戍病院に翌二日午後九時四分自殺した。

二、少佐の実兄成沢知行退役中佐が遭難後、少佐発見の報に東京から青森へやって来て、死の前の少佐に会っている。その時山口少佐は「遭難の顛末を津川謙光連隊長に報告したうえで、武人らしく身の始末をする」と語った。成沢中佐はそのあと帰京、自宅に帰ったら青森から電報が届いて、少佐が病死したという報に「病死とは信じられない。」と家人に語った。

三、成沢中佐は再び青森に来て津川連隊長に会い「弟が凍傷のための衰弱死したとは見えない。自殺したはずだ。」と主張した。これに対して連隊は「山口少佐は武人らしく立派に自殺した。しかも自殺が公表されると生存した倉石大尉ら三人の士官もまた、大隊長の責任ではないとして後追い自殺する恐れがある。対露戦役が予測されるだけに、これ以上将兵の損耗は許されない。残念だが目をつむってほしい」と説得した。

四、成沢中佐は涙をのんで帰京し家人に対して「弟は名誉ある軍人だった。しかし自殺のことは世間に言ってはならない」と口止めた。

成沢中佐の二女が米田みねさんと、少佐自殺に使われたピストルは、山口少佐の養女となっていた米田さんの姉が保

存しており、小笠原さんが譲り受け、現在青森市の陸上自衛隊第九師団の防衛館に展示されている。

新田がこの小説を執筆するため、青森にきて小笠原に会ったのは、昭和四十五年（一九七〇）七月である。丁度小笠原が米田みねさんに会った直後のことであり、小笠原はこのことを新田に伝えたのである。

筆者は前著<sup>(三)(四)</sup>において、「筆者は自殺説を全く否定するものではないが、その根拠とする所はすべて伝聞に基づいている点を指摘したのである。」と記したが、村上其一の手になる新史料の出現は、筆者のこの考えを一層強固にするものである。

山口少佐の自殺説について、青森の郷土史家肴倉<sup>(二六)</sup>弥八も「山口少佐が責任ある立場から自殺を實行したと仮定した場合、凍瘃し衰弱した山口鋌少佐に身体的自由と力があつて意のまま、拳銃なり軍刀なりを果して使えただろうかという問題が強く支配し、否定的要素が強いのだが」と記している。

確かに山口少佐の家族にとつては、少佐が何ら行軍の責任をとることなく、救助活動の最中に凍傷によつて病死したとなれば非常に肩身の狭い思いをすることは必定である。このため津川連隊長が成沢退役中佐に「実際に山口少佐は病死したのであるが、山口少佐が遭難事故の責任をとつて自決した」と伝えた可能性も十分にある。しかしそれでは虚偽のことを家族に伝えるわけであるから、他の生存者へ自決の波及を恐れることを理由に、そのことは是非山口少佐の遺族だけの胸の内に収めて欲しいと付け加えた可能性も、十分納得出来るところである。

一般に「証人がいる」とか「使われたピストルも存在する」という風に報道されると、一般の人々はそれを容易に信じやすい。厳密にはこれらは全く伝聞の域を出さないものばかりである。証人といつても直接山口少佐の死亡に立ち会った訳でもなく、ピストルがあるといつても、それは単に山口少佐の所有するピストルというだけの話でそれが実際に使われたのか否かも分からない。単なる噂に過ぎないのである。一般的に考えても重症な凍傷患者の枕元にわざわざピ

ストルを持参することはありえないことである。だれ一人として山口少佐が自殺したのを見た者はいないし、それを実証する証拠もない。山口少佐の病室が「個室で他の患者と隔離されていたという」と噂があつて、これも自殺説に有利なことと思われているが、地位の高い者の病室を一般患者の病室と区別することは一般の慣習であり、何も衛戍病院に限つたことではない。現に今でも病室に余裕があれば、それなりの地位の人は個室などに入院させるのは日常の慣習である。

## 八、おわりに

以上述べてきたことによつて山口少佐の自殺説は全く風聞の域を出ないものであることが理解される。しかし一旦著名な作家が小説の形で山口少佐が自殺したと書くことと逆にそれが「真実」となつて後世に伝えられる。小説によつて得られる感動が一般の人々に「虚構」を「真実」と誤らせるのである。しかしこのことは、正しい歴史にとつて恐ろしいことである。

(三三)四

筆者は前著の中で、病死以外にもう一つの考え方、つまり山口少佐が処分された可能性を指摘した。ピストルが使われ、しかも山口少佐が凍傷のため引き金を引けない状態であつたとすれば、他人が引き金を引いたとしか考えられない。あくまでも病死以外の可能性として掲げておき、これについては後日を期したい。

本稿を執筆するに当たつて御協力を得た東奥日报社、陸上自衛隊第九師団の方々に御礼申し上げます。

文献

- (一) 新田次郎『八甲田山死の彷徨』新潮社、昭和四十六年
- (11) Jiro Nitta : Death March on Mount Hakkoda—a documentary novel—translated by James Westerhoven ; Berkeley, Atone Bridge Press, 1992
- (三) 松木明知「第八師団歩兵五連隊の雪中行軍遭難の医学的考察」『日本医史学雑誌』二五卷四号、昭和五十四年十月。二六卷一号、昭和五十五年一月
- (四) 松木明知「第八師団歩兵五連隊の雪中行軍遭難の医学的考察」『青森県医史』津軽書房、昭和五十五年所収一二九頁
- (五) 青森市編纂室、青森市史別冊「歩兵第五連隊八甲田山雪中行軍遭難」『六十周年誌』所収
- (六) 青森衛戍病院「明治三十五年 凍傷患者治療景況」『陸軍軍医学会雑誌』第百三十六号、明治三十六年五月
- (七) 歩兵第五連隊『遭難始末』(再版)、昭和三年十月(初版は明治三十五年七月)
- (八) 北辰日報編輯部『第五連隊遭難始末 附三十一連隊雪中行軍記』近松書店、明治三十五年三月
- (九) 百足登『青森連隊遭難雪中行軍』(四版) 有千閣書店、木文書店、明治三十五年五月(初版は明治三十五年二月十六日)
- (10) 『東奥日報』一九九二年一月二十五日 夕刊、第三面
- (二) 「青森歩兵第五連隊の遭難」  
『東京医事新誌』一二四二号、一三三二頁、明治三十五年二月八日
- (三) 「永井三等軍医の遭難」『東京医事新誌』一二四二号、一三三三頁、明治三十五年二月八日
- (三) 「永井軍医逝矣」『陸軍軍医学会雑誌』一二七号、三〇〇頁、明治三十五年四月
- (四) 文献(七)の一七三頁
- (五) 『東奥日報』朝刊第十五面、昭和五十二年十一月十一日
- (六) 看倉弥八「実録でつづる八甲田山雪中行軍(最終回)」『グラフ青森』第四卷第三号、一九七八年

(弘前大学医学部)

# Medical Aspect of the Winter March of the Fifth Regiment of the Eighth Military Division in the Winter of 1902

— Particular Concerning the Cause of Major Yamaguchi's Death —

by Akitomo MATSUKI

Two hundred and ten military soldiers of the Fifth Regiment of the Eighth Division of the Japan Imperial Army joined a marching practice in the end of January, 1902, but 193 soldiers out of 210 died due to severe frost-bite during stormy weather and only seventeen, including Major Yamaguchi, were rescued to survive and brought to the Veteran's Administration Hospital at Aomori. This accident was most tragic and world-shaking for the Japanese people as well as for the Japanese Imperial army.

In December of 1991, an admission record of the Veteran's Administration Hospital at Aomori was found in the residence of Dr. Murakami of Aomori City. Judging from its handwriting, this record was written by a military physician Ki-ichi Murakami, Dr. Murakami's uncle. The record describes the details of seventeen patients, most of whom were severely injured and frost-bitten during the winter march.

The content of this newly discovered record is similar to the report written by the military physicians of the Fifth Regiment which appeared in the Japan Imperial Military Medical Journal, but a more detailed description about Major Yamaguchi's vital signs, and symptoms of his frost-bite were found in the former. In the journal, Major Yamaguchi was reported to have died because of sudden cardiac arrest but

Jiro Nitta described in his novel “Death March on Mount Hakkoda” that he committed suicide using his gun. However, this record strongly tells us that both of his hands, as well as both lower extremities, were severely frost-bitten and swollen and that he could not pull the trigger of his gun with his fingers.

Since Jiro Nitta’s novel has been published, it is widely accepted that Major Yamaguchi committed suicide with his gun. But we do not have any definite proof to substantiate his suicide. The present detailed survey on the medical references strongly suggests that he could not have pulled his gun’s trigger by himself.